探訪 北の風景 ㉓

開湯150周年の定山渓温泉

札幌市

青木和弘

定山渓の開祖、修験僧・美泉定山（みいずみじょうざん）は、備前（岡山県）の寺院の二男として生まれ、真言密教の荒行を積み、巡錫（じゅんしゃく）の旅で北を目指した。現小樽市張（はり）碓（うす）に滞在中、アイヌ民族の猟師から素晴らしい湯が湧く所があると聞き、２人のアイヌの先導役と険しい山を越え、現在の定山渓にたどり着き、病に苦しむ人のために湯治場を開いた。今から１５０年前、１８６６年（慶応２年）、定山が61歳のときだ。

明治維新による紆余曲折を経て、開拓使の岩村通俊判官の理解を得、温泉開発が始まる。札幌から豊平川沿いに人馬が通れる道が開かれ、温泉の傍らに建坪64坪半の休憩所を建設。岩をうがって浴槽を設け、１８７１年（明治４年）に官設の温泉場が誕生した。経費は１５７２円で、定山が「湯守り」に任命され、扶持米が支給されたと「さっぽろ文庫・定山渓温泉」にある。

岩村判官の遺稿集「貫堂存稿」の中に、「（定山は）豊平川の上流に温泉がある。ここに鹿が来て湯浴びしているのをよく見る。それは傷をした鹿や病気の鹿のようだ。もしかしたら人間にも効くのではないか」（原文は漢文。同文庫より）と温泉開発を直訴したと記されている。

温泉が広く庶民に利用されるようになったのは江戸時代からだ。お伊勢参りに代表される観光旅行の慰安の場となる一方、ケガや病気治療のために逗留する湯治場が、現代の入院療養を担う病院のような役目を負っていた。だから、西洋医学が普及していない１５０年前、温泉は、なくてはならない医療施設だったのだ。

では、定山渓の温泉はどんな湯なのだろう。定山渓観光協会によると、泉源は豊平川の川底などに56カ所あり、毎分約８６００リットルの湧出量がある。湧出温度は60～80度と高温だ。泉質はナトリウム―塩化物泉（旧泉名・食塩泉）で、日本では一番多い泉質だが、実は、海水や化石海水、マグマ活動から発する熱水やガスに由来するものではないという。「グリーンタフ型」という意外に少ない食塩泉なのだ。

グリーンタフとは、２３００万年から５００万年くらい前（地質時代区分の新第三紀中新世）につくられた緑色凝灰岩のこと。海底火山が吹き出した溶岩が、地殻変動で高温・高圧にさらされ、海水成分を取り込んだまま変成し、その地層が隆起して日本列島の一部になった。定山渓温泉が海から離れているのに食塩成分が濃いのは、雨水がこの地層にしみ込み、成分を溶かし込んだ熱水となって湧き出ているからだ。道内のグリーンタフ型温泉では、八雲町の見市（けんいち）温泉と平田内（ひらたない）温泉が、定山渓温泉と起源や生成機構が類似しているという。

定山源泉公園にある美泉定山の座像

定山渓の湯にはフッ素や、美肌効果のメタ珪酸、消毒効果のあるメタホウ酸、皮脂や角質を落とす重曹も豊富で、肌触りがなめらかで、体がぽかぽか温まる優れた湯である。

二泊三日の「ミニ湯治」でも免疫力が高まり、

月見橋から眺める温泉街の渓谷。豊平川の川底から高温の豊富な温泉水が自然湧出している

その効果は数カ月間持続する。近年、温泉療法の研究が進み、現代社会の心身の疲れを癒し、病気を予防するのに有効だと、温泉の健康利用が見直されてきている。開湯１５０周年を迎えた定山渓温泉は、観光やレジャー、慰安に加え、かつてあった、病を癒す保養地の機能を再評価する取り組みが、求められているのではないだろうか。

現在、定山渓の宿泊施設（小金湯温泉、豊平峡温泉を含む）は、ホテル・旅館16軒、保養所・コンドミニアム３軒の合計19施設。日帰り施設が２軒。２０１４年の入り込み数（入湯税による）は、宿泊１１４万６６３１人、日帰り37万１５８９人、合計１５１万８２２０人。宿泊者のうち外国人の割合は約10％だという。ちなみに、近年の入り込み数のピークは２００２年で、１８１万７０５６人だった。

温泉街のいたるところにカッパ像がある。月見橋にある「ボクと記念写真」（小石匠：1991年作品）